



筑紫女学園大学リポジト

Tautologies : Emphasis through Grounding

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/247

トートロジー - 背景化による強調 -

緒 方 隆 文

Tautologies: Emphasis through Grounding

Takafumi OGATA

1. はじめに

「約束は約束だ (Promises are promises.)」といったトートロジー表現を本稿は考察する。日本語のトートロジーを中心に論を進めるが、その理由は他言語に比べ、日本語のトートロジー表現が豊かであり、トートロジー解明の手がかりが多いと考えるからである。本稿の目標は(1)の問いに答えることである。

(1) a. トートロジーとは何か(どういう表現であるか)

b. トートロジーはどのようにして意味を獲得するか(有意味化の手順)

まず(1a)に対し本稿の結論は、トートロジーは強調表現の一種であり、カテゴリーの再確認・再定義をする構文とする。このとき「対比するものの背景化」というプロセスが働くとは本稿は考える。この背景化は2種類あり、それに応じてトートロジーもまた、2種類に分類する(内部背景化トートロジーと外部背景化トートロジー)。先行研究においても、トートロジーの分類は様々な観点から行われている(Wierzbicka 1986, 坂原 2002, 藤田 1988, 平井 1995, etc.)。しかしほとんどが形式、機能、意味、発話状況による分類であって、トートロジーの特徴・特性を述べたに過ぎない。本稿の分類は、それらと違い生成プロセスの違いをもとに分類する。この分類により、トートロジーにおける多義性、状況の多様性、副詞との共起関係、英語の冠詞等の違いを説明していく。

次に(1b)に対しては、まずトートロジーの意味が、状況・文脈にどこまで依存するかが問題になる。状況・文脈に強く依存する考え方に、Grice (1975), Levinson (1983) がある。一方これと反対の考えが、Wierzbicka (1986) である。彼女は特定の状況・文脈によらず、トートロジーに特有な表層表現を見ることで、トートロジーの意味が分かるとした。そしてこの両者の折衷案的考えが、Fraser (1988), Gibbs and McCarrell (1990) などがある。本稿は、折衷案的考えをとる。しかし先行研究と違う点は、(1a)で示した生成プロセス(「対比するものの背景化」)を組み入れて説明する。具体的には語彙の繰り返し、コピュラ文、助詞、副詞、表現形式、語用論的知識の6要因に、背景化のプロセスが加わって、トートロジーは有意味化すると考えていく。

以下の構成は、まず2節でトートロジーを定義する。それをふまえ、3節でトートロジーを分析する。ここでは2つの背景化を提示すると共に、助詞及び、副詞との共起関係をみる。4節では関

連表現を見る。そしてトートロジーは強調表現の一種であることを示す。5節では英語のトートロジーについてふれ、6節で有意義化のメカニズムを見る。最後に7節をまとめとする。

2. 定義

トートロジーは、2つの X が、繋辞によって結びついた構文である。典型的には「約束は約束だ」のように、「X は X だ」の形をとる。とはいえ、「は」の代わりに「が」「も」が使われたり、様々な表現がある。そこで2つの X が繋辞によって結ばれた構文を、便宜上 [X is X] と表す。通例はこの形式をもって、トートロジーとするが、本稿ではさらに、条件を課したい。恒真(つねに真)という条件である。

トートロジーが情報のない表現と思われがちなのは、当たり前前の表現、つまりいつでも正しいという恒真の表現だからである。そのため否定することができない。「約束は約束でない」はいわば矛盾した文であり、意味をなさない。

しかし見落とされがちなのは、[X is X] の形であっても、恒真にならない場合がある。すなわち否定できる。

(2) a . The president is the president, because 52% of the people voted for him.

b . The president is not the president, because 52% of the people did not vote for him.

((2a) のみ Fauconnier (1994))

(3) a . 選挙に勝ったので、大統領が大統領だ。

b . 選挙に負けたので、(もはや) 大統領は大統領でない。

(2)(3) で、主語の大統領 (president) は特定の大統領を指示し、2つめの大統領は役割を示す。役割は、そうでなくなることもある。役割がなくなれば (2b)(3b) のように否定できる。つまり恒真ではないため、否定できる。(2)(3) は、いわば役割付与の文であって、そこには伝える情報がしっかりとある。さらにこの種の構文は、疑問文にすることもできる。

(4) a . Could you tell me the election outcome? Is the president the president?

b . 選挙結果はどうになりましたか。大統領が大統領ですか。

普通のトートロジーは、疑問文や否定文が作れない。そのため、この種の構文は全く異なるものと言える。このような恒真でない [X is X] の形をとるものを、擬似トートロジーと呼び、恒真の [X is X] と区別をしたい。ちなみに日本語では、主節に現れる「X が X だ」の文がこれに相当する。

一方恒真ではあるが、[X is X] の形式を取らない表現がある。(5) に例を示す。

(5) 1 . 「A が A でないか (のどちらか)」(彼は来るかも知れないし来ないかも知れない)

2 . 「A ならば A」 (負けたのなら負けたのだ)

3 . 「A のときは A」 (やるときはやる)

4 . 「A だから A」 (好きだから好き)

5. 「A なものは A」 (いいものはいい) (瀬戸 1997: 64-65)

これらの表現は広義にはトートロジーと言えるかもしれないが、本稿ではトートロジーと区別し、トートロジー的表現と呼ぶ。この表現は [X is X] の形式を取らないが、本質において、トートロジーと同じであり、同じように説明することができる。以上をまとめると (6) のようになる。

- (6) a. トートロジー : [X is X] の形式をとり, 恒真
- b. 擬似トートロジー : [X is X] の形式をとり, 非恒真
- c. トートロジー的表現 : [X is X] の形式をとらず, 恒真

3. トートロジーの分析

2節の定義をもとに、トートロジーを分析する。ここでの結論は2つある。一つはトートロジーは基本的に、カテゴリーの再定義・再確認ということである。もう一つは、そのために「対比するものの背景化」というプロセスを用いることにある。このプロセスは、外部背景化と内部背景化の2つがあることを述べる。

3.1. 対比するものの背景化

トートロジーの本質は、カテゴリーの再確認である。カテゴリーとは本来、連続的なもので、その境界線は時としてゆれる。この連続的なものを非連続的なものとして、はっきり区切りをつけ再確認(再定義)するのが、トートロジーである。

例えば柔道の試合で、一番の実力選手がケガが直りきらずに出場し、それでも善戦し、優勝戦で逆転負けしたとする。それを後輩が、「ケガを考えれば実際は優勝(勝ち)ですよね」と言い、選手が「負けは負け」と言ったとしよう。勝ち負けの判断は連続しており、その境界線は時にゆれる。その連続性を否定し、勝ちと負けにはっきりと線引きし、[負け]というカテゴリーを再確認(再定義)するのがトートロジーと言える(cf. 中村 2000)。

ではこの再確認(再定義)をどのような形で行うのだろうか。方法は2つある。一つは X は Y でないもの、と [他のものでないことを述べる] 方法である。もう一つは X は x という属性をもったもの、と [中身に言及する] 方法である。

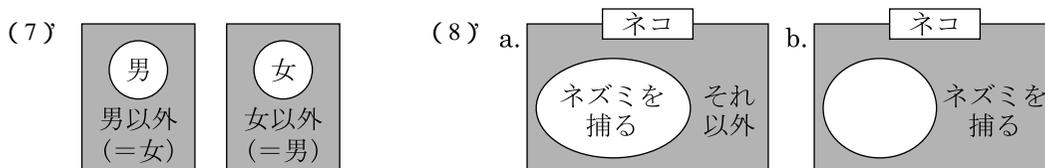
具体例で考えよう。以下の(7)は前者の [X は Y でないもの]、(8)は [X は x という属性をもったもの] という方法で、再確認を行う。(7)の前半部分は、男は男であって、男以外のものではない。後半部分は、女は女であって、女以外のものではない。という意味である。つまり他のものでないことを強調することにより、カテゴリーを再確認している。一方(8)では、ネコの属性が問題になっている。(8a)の場合ネズミを捕るネコに限定して、(8b)の場合ネズミを捕らないネコも含めて、ネコのカテゴリーを再定義している。

(7) しょせん、男は男、女は女だ。

(8) a. ネズミを捕ってこそ、ネコはネコだ。

b. ネズミを捕らなくても、ネコはネコだ。 (坂原 2002: 112-3,124)

こうした再確認(再定義)のプロセスを、本稿では「対比するものの背景化」によってとらえ直す。つまり(7)では、各々対比する「男以外」「女以外」を背景化することで、[男]ないしは[女]を再確認する。一方(8a)では[ネズミを捕る以外の特性]を背景化し、基準を[ネズミを捕る]に限定し、カテゴリーの再定義を行う。(8b)では[ネズミを捕る]を背景化し、それを除外したネコの特性で、ネコというカテゴリーを再定義する。これを図示したものが、(7)と(8)である。

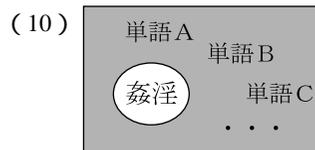


しかし背景化に対しては、異論が想定される。トートロジーとは、単にその語のプロトタイプの要件に焦点を当てる構文であって、背景化という手順は不要とする考え方である。しかしそれでは(8a, b)の違いをうまく捕らえられないし、坂原(2002: 107)が述べる、(9)のような記述拒否の例が説明できない。ここでの設定は、子供が聖書を読んでいて、「姦淫」という語が理解できず尋ねるといったものである。

(9) 子供: 姦淫ってなに?

母親: 姦淫は姦淫。子供はそんなことは

知らなくていいの。 (坂原 2002: 107)



(9)では、姦淫のプロトタイプの要因は、何ら関与していない*1。

姦淫という言葉は、姦淫という言葉であって、それ以外のものではない。他との対比によって意味が成立している。図示すれば、(10)になる。つまり姦淫以外の言葉をすべて背景化したにすぎない。トートロジーを統一的に説明するには、対比による背景化という概念が必要である*2。

さてここで2つの背景化に名前を付ける。まず[XはYでないもの]とする場合、いわば外部のYを対比し、背景化する。よって外部背景化と呼ぶ。一方[Xはxという属性をもったもの]とする場合、いわば内部の特性(x以外)を対比し背景化する。そのため内部背景化と呼ぶ。このときトートロジーは、外部背景化トートロジーと、内部背景化トートロジーの2つがあることになる。

このように2つのトートロジーがあることは、トートロジーが2つの解釈を持つことで明らかになる(例と解釈のみ、坂原 2002: 119)*3。

(11) いくら大きいと言っても、ネコはネコだ。

解釈1. 問題になっているネコの大きさを認めた上で、大きいことがそのネコをネコのカテゴリから排除するには当たらない。

解釈2. 大きさも、あくまでネコの大きさであり、たいして大きくない。

(12) 賢いと言っても、子どもは子どもだ。

解釈1. 賢い子どもだが、その他の属性に関しては、子どもである。

解釈 2 . 子どもという限定を離れれば、たいして賢いわけでない。

(13) いくら安くても、ダイヤはダイヤだ。

解釈 1 . ひどく安いのが、ダイヤであるのは事実だ。

解釈 2 . ダイヤとしては安いのが、結構、高額な買い物である。

(11)-(13)の解釈 1 は、内部背景化トートロジーの解釈である。(14a)に示すように、(11)では大きいこと、(12)では賢いこと、(13)では安いことを各々背景化することで、カテゴリーを再定義している。一方(11)-(13)の解釈 2 は、外部背景化トートロジーの解釈である。(14b)に示すように、(11)では対比する他の大きい生き物を、(12)では対比する賢い大人を、(13)では対比する他の安い品物を各々背景化することで、意味が成立している。つまり内部背景化か、外部背景化かの選択は、形式に固有なものではなく、その文脈・状況に応じて語用論的に決まってくるのが分かる。

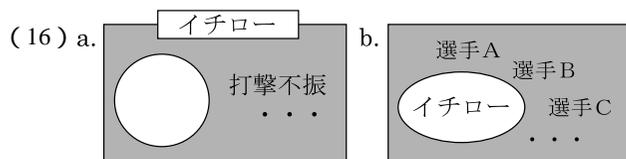


さらに使われる状況が異なる場合、トートロジーの種類が入れ替わることがある(例と状況設定のみ、坂原 2002: 118)。(15)には2つの状況が考えられる*4。

(15) イチローはやはりイチローだ。

状況 1 . イチロー選手が打撃不振の状態から、再び打撃が好調になったとき (X が X にふさわしくない状態から、X にふさわしい状態に復帰)

状況 2 . イチローがすでに絶好調のときに、その絶好調を確認するかのようにヒットを打ったとき (X がすでに X にふさわしい状態なのを確認)



状況 1 に相当するのが(16a)である。イチローらしからぬ打撃不振だった状態を背景化し、本来のイチローを再確認している。これは内部背景化トートロジーである。一方状況 2 に相当する(16b)では、他の選手を背景化している。つまり他の選手とは違い、イチローはイチローである、と述べている。これは外部背景化トートロジーである。こう考えると(15)は、状況 1 でも 2 でも、同じ意味をもつように思えるが、実は背景化するものが違い、それに伴い意味が微妙に違っている。そしてそれは、「対比するものの背景化」によって説明される。

以上「対比するものの背景化」には2分類、つまり外部背景化と内部背景化がある。これは、意味による分類ではなく、意味成立過程の違いである。これにより、解釈の多義性(11)-(13)、状況による違い(15)が説明される。次節で、助詞「は」「が」「も」及び名詞以外のトートロジーに

ついて、「対比するものの背景化」を検証する。

3.2. 「は」

トートロジーの代表的形式「X は X だ」は、すでに上で見てきた。この形式には、内部背景化と外部背景化の両方がある。話の重複をさけるため、本節では「は」と副詞の関係、「X は X だ、Y は Y だ」の表現の2つを述べていきたい。

まず副詞であるが、どの副詞をとるかで、背景化の種類が決まることがある。内部背景化には「やはり／やっぱり」「それでも」「いつも／相変わらず／いつまでたっても」、外部背景化には「さすがに」「所詮」の副詞がつく。

(17) a. やはり安物は安物だ。

b. 藪医者と言われようが、それでも医者には医者だ。

c. 太郎はいつまでたっても、太郎だ。

(18) a. さすがに大型株は大型株。少々売りがでても変動がすくない。

b. 所詮、うそはうそ。所詮、偽物は偽物。

むろん副詞を入れ替えることで、外部背景化と内部背景化の意味を変えることができる。しかし意味解釈が、片方の背景化に偏っている場合、適格性に違いがでる場合がある。(19a)では外部背景化の解釈が優先されるので、「やはり」がつくと不自然である。逆に(19b)では内部背景化が優先され、「所詮」がつくと不自然になる。副詞が、いわば標識となり、内部背景化か外部背景化のどちらかを導いている。

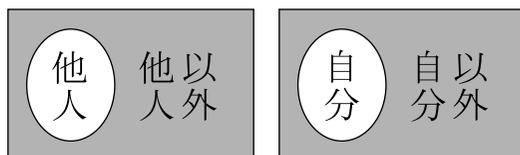
(19) a. {所詮／??やはり} 過ぎ去ったことは、過ぎ去ったこと。

b. {??所詮／やはり} 盗みは、盗みだ。

次に「X は X だ、Y は Y だ」の表現形式を見る。(20a)のプロセスを図示したものが(20b)である。ここでは外部背景化が連続して起こっている。このことにより、X と Y が全く別もの、別カテゴリーであることが強調される。ただしこの形式では、X と Y はもともと同じカテゴリーに属していて、セットとして考えやすいものでなければならない(野田 1996: 7)。

(20) a. (所詮) 他人は他人、自分は自分だ。

b.



なおこの表現と似たものに、「X も X (だが／なら)、Y も Y だ。」(後述、3.4 節)があるが、背景化する図式が違い、意味も異なる。

3.3. 「が」

[X is X] 形式で「が」を使う表現には、通例のトートロジーと、擬似トートロジーがある (cf. 2 節)。擬似トートロジーの解釈になるのは、「X が X だ」が単独で使われたり、主節に現れる場合である。そのため擬似トートロジーの解釈が持てない場合、「が」を用いれば、不適格ないしは

不自然である。

(21) a. ??約束が約束だ。

b. ??ネズミを捕らなくても、ネコがネコだ。

よって従属節の中で用いられ「X が X (だから / だけど / だけに), ...」「X が X なら, Y も Y だ」の形式をとるとき, トートロジーの意味を持つことになる。

まず, 「X が X (だから / だけど / だけに), ...」から考えていく*5。この場合若干擬似トートロジー的になる。すなわち間接的に指し示すものがある。

(22) a. 場所が場所だから, 客が入らないわけがない。

b. 時間が時間だけに, 普段込んでいる道もスイスイ通れました。

c. 季節が季節だけど, 冷酒をいただくよ。

2つめの名詞は各々, (22a) では [この場所], (22b) では [今という時間], (22c) では [今の季節] を指す。とはいえ直接的ではなく, (22a) では [人通りが多い場所], (22b) では [遅い時間 / 早い時間, etc.], (22c) では [寒い季節] などと, 指し示す物の特性と直接結びついている。

(22a) で言えば, [場所は, 人通りが多い場所ここなので,] という意味である。

このとき外部背景化のプロセスが働く。図示すれば (23) になる。指し示すものの特性が強調されるのは, その特性を持たないものを背景化するからである。どの特性を背景化するかは文脈によって決まる。

(23) a.



b.



c.



こうした「が」の特性は, 「は」と比べることでより明確になる。(24a) は, 「は」を使い内部背景化, (24b) は「が」を使い外部背景化がおこっている。(24a) では, 「時間は貴重だから...」などの意味, 一方 (24b) では「今はもう定刻(を過ぎている)だから...」と全く異なる意味になる。背景化の違いに加えて, 指標の問題が関わっている。

(24) a. 時間は時間だから, 始めましょう。

b. 時間が時間だから, 始めましょう。

またこの形式をとるものの中には, 擬似トートロジーの例もある。(25a) の例がそれで, (25b) のように否定できる。(25a) の2番目の「監督」は監督の特性ではなく, 特定の監督を指し示している。一方トートロジー(22)の表現は, 否定することができない((26))。

(25) a. 監督が監督だから, 細部まで凝った映像になっている。

b. 監督が監督でなかったら, あれほど細部まで凝らなかっただろう。

(26) *時間が時間でなかったら..., *場所が場所でなかったら...,

*季節が季節でなかったら...

次に「X が X なら, Y も Y だ」の形式を見ていく。この構文には2つのプロセスが関わる。

一つは内部背景化のプロセスで、X と Y の共通特性以外が背景化される。共通特性は文脈で決まるが、通例は望ましくない特性を指す。二つめはその共通特性の因果関係のプロセスがある。X が Y に影響を及ぼしている。(27) を図示したものが (28) である。背景化と因果関係の2つのプロセスが、示されている。

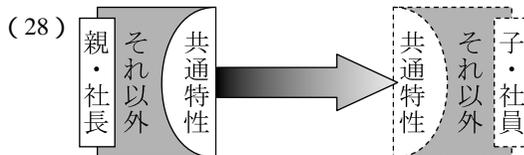
(27) a. 親が親なら、子どもだね。

b. 社長が社長なら、社員も社員だね。

(27a) で説明すれば、親も子供も似た悪い点

があり、それ以外の特性を背景化することで、

共通特性が強調される。しかもそれは親から子に何らかの影響、関連があると見る。こうした含意があるため、通例「子が子なら、親も親だね」には違和感が生じる。しかしそれとて、文脈次第では十分適切な文となる。



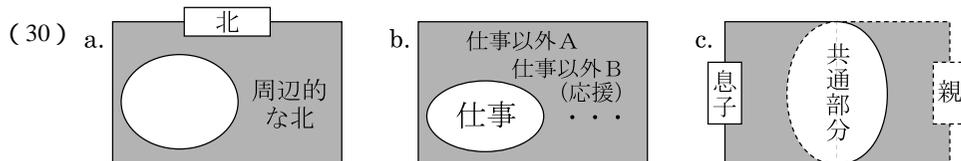
3.4. 「も」

「も」を使うトートロジーにも、内部背景化と外部背景化の両方があり、表現形式により決まっている。内部背景化の表現として「X も X, ...」(29a), 外部背景化の表現として、「X も X だが, ...」(29b), 「X も X (だが/なら), Y も Y だ」(29c) がある。(29) の例を各々図示したものが、(30) になる。

(29) a. 私の叔父は、北も北、北海道に住んでいます。

b. 仕事も仕事だが、阪神タイガースを応援しに行かなければならない。

c. 息子も息子だが、親も親である。人の話を全く聞かない。



まず内部背景化の例 (29a) であるが、この場合 [周辺の北] が背景化され、[北] の意味が強調されている (30a)。次に外部背景化の1つめ「X も X だが, ...」(29b) では、仕事以外が一旦背景化される。そして主節で [仕事以外 (応援)] に再焦点が当てられる (30b)。そして外部背景化の2つめ「X も X (だが/なら), Y も Y だ」(29c) では、共通部分 (人の話を聞かない) 以外が背景化される (30c)。この表現は「XもXだ」(例: あなたもあなただ) と単独で用いられることもあるが、図式としては、(30c) と同じであって、Y は文脈から推測される。この (30c) の共通部分は、通例望ましくないものが来て、非難の意味を持つことが多い。

3.5. 名詞以外のトートロジー

トートロジーの主語 (属詞) になるのは、名詞だけではない。(31) のように動詞*6, (32) のように形容詞*7が使われることがある。

- (31) a. メールは見るは見るんですが、返信には時間がかかります。
 b. 愚痴は聞くは聞くけど、いいアドバイスはできないと思うよ。
 c. あの人は言うは言うけど、何もしないのよね。
- (32) a. 今年の夏も暑い暑いけど、去年に比べればましです。
 b. 君の意見は正しいは正しいが、人への優しさが無いね。
 c. 営業の仕事はつらいはつらいが、楽しいこともあるのです。

動詞や形容詞のトートロジーの場合も、名詞のトートロジーと同じく、「対比するものの背景化」が起こっている。ただしこの場合、外部背景化になる。動詞が表す以外の行為、形容詞が表す以外の状態が、各々背景化される。図示したものが、(33)(34)である。(33)が(31)に、(34)が(32)に対応している。



(31)(32)では、トートロジーの後にすべて「～ですが/けど/が」が付加している。そのことにより、一旦背景化されたものが、主節で復活したり、否定されたりしている。例えば(31a)では、一旦背景化された[見る以外の行為(返信する)]が主節で焦点が当てられる。また(32a)では、対比した[暑い以外の状態(寒い、涼しい, etc.)]が否定される。つまり対比するものが違えば(ここでは去年の夏の暑さと対比すれば)、それほど暑くはないと述べる。いずれにしる動詞や形容詞のトートロジーもまた、「対比による背景化」で説明されることとなる。

なお(31)(32)ではトートロジーはすべて従属節に現れているが、主節に現れることもある。この場合でも、「対比による背景化」が働いていることはいうまでもない。

- (35) 並べられた骨董品はすべて古いが、手入れがよく、きれいはきれい。

4. 関連表現

本節では、トートロジーの関連表現を列挙する。そして、それらすべてが「対比するものの背景化」によるものであり、一種の強調表現であることを見る。

4.1. トートロジー的表現

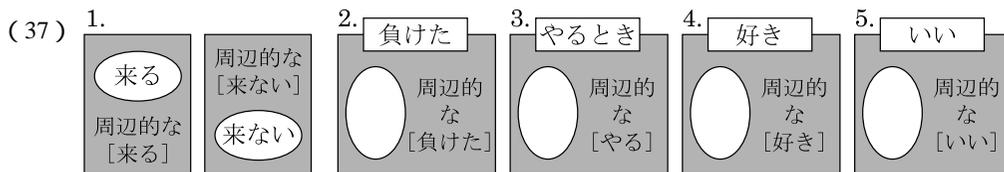
トートロジー的表現とは、2節で定義したように、[X is X]の形式を取らない恒真の表現である。(5)を以下に再掲する。

- (36) 1. 「A が A でないか(のどちらか)」(彼は来るかも知れないし来ないかも知れない)
 2. 「A ならば A」(負けたのなら負けたのだ)
 3. 「A のときは A」(やるときはやる)

4. 「A だから A」 (好きだから好き)

5. 「A なものは A」 (いいものはいい) (瀬戸 1997: 64-65)

これらは [X is X] の形式を取らないが、トートロジーと同じく「対比するものの背景化」というプロセスによって、意味が成立すると考えられる。図示したものが (37) で、各番号は (36) に対応している。



すべてに共通して「周辺のな X を背景化する」という、内部背景化のプロセスが起こる。まず 1. では、内部背景化が連続して起こる。前半で「周辺のな [来る]」、後半で「周辺のな [来ない]」を背景化する。このことにより、彼の行動を、二項対立的に捉える。来るか、来ないか、そのどちらかであって、中間的なものが排除される。すなわち行動の再定義が起こなわれている。2. では、[周辺のな負け] を背景化 (除外) し、「負けた」を再定義している。3. では、A という状態に入ったときには、周辺のな A はない、ということ述べる。つまり「周辺のな [やる] (中途半端な実行など)」を背景化することで、「やる」という行為を再定義している。4. でも「周辺のな [好き]」を背景化する。そうすることで「好き」を強調する。最後の 5. だが、ここでも「周辺のな いいもの」を背景化することで、「良い」を強調する。

このようにトートロジー的表現もまた、「対比するものの背景化」というプロセスにより、無意味に陥ることなく、意味が成立する。また繰り返しの表現を使うことで強調の意味がここにはある。

4.2. 擬似トートロジー

擬似トートロジーとは、2 節で述べたように、[X is X] の形式をとり、非恒真の文を指す。(2)(3)a の例文を、(38) として以下に繰り返す。

(38) a. The president is the president, because 52% of the people voted for him.

b. 選挙に勝ったので、大統領が大統領だ。

(38) のような擬似トートロジーでは、単に役割と具体物を結びつける働きをしている。(38) では「大統領の役割をするのが、現在の大統領だ」と両者を結びつける*8。つまり指標の問題になる。

そのため通例のトートロジーと違い、the president 自体を再定義しているわけではない。実際、1. 否定文にも疑問文にもなれ、2. 恒真でない。よってトートロジーとは全く異なる性格を持っている。

しかしこの擬似トートロジーもまた、一種の強調構文と言える。同じ president という語を繰り返すことによって、継続性が強調される。

ここでもまた「対比するものの背景化」というプロセスが働いている。図示すれば (39) になる。現在大統領でない候補者を背景化することで、the president が、the incumbent president (現在の大

(39)



統領)であること, すなわち president の継続性が強調される。こう考えると, トートロジーと擬似トートロジーは2つの共通点がある。「背景化のプロセス」及び, 形式 [X is X] である。そのため, この擬似トートロジーもまたトートロジーに含み入れる可能性が生じる。しかし否定文や疑問文になれる点, 表す意味が全く異なる点, 恒真でない点などを考えるとき, 共通部分より差異が大きい。そのためトートロジーとは別扱いの方が自然である。

4.3. 繰り返し表現

繰り返し表現とは, [X is X] の形をとらずに, 語などを繰り返す表現を指す。通例は She is very very happy. のように2回繰り返すものが多いが, 3回繰り返す3重繰り返し (Triple repetition) の例もある ((40) は, 吉田1982: 170-171)*⁹。

(40) a . “ I love love love you, ” he mumbled between kisses. “ Love love love you. ”

- Jackie Collins: Chances

b . The air is clear, your sinuses feel grand, and you’re alive, alive, alive.

- B. Glemser: *The Super- Jet Girls*

c . She broke down and put her hands over her eyes, weeping bitterly. What a morning! Nothing but tears, tears, tears. - B. Glemser: *Here Come the Brides*

d . This dream never reached a conclusion. It just went on and on and on.

- Joe McGinnis: *The Dream Team*

(40a) は動詞 love, (40b) は形容詞 alive, (40c) は名詞 tears, (40d) は副詞 on が繰り返されている。そのまま連続して並べる場合と, and が挿入される場合がある。

また語だけではなく, 句や節も繰り返される。(41a) では asked her, (41b) では they wanted が3回繰り返されている。

(41) a . He asked her and asked her and asked her.

(小西 1982: 100)

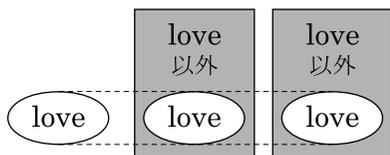
b . They wanted him for guest shots, record albums, personal appearances, merchandising, benefits, movies, they wanted they wanted they wanted.

- Sheldon, *A Stranger in the Mirror*, p.244

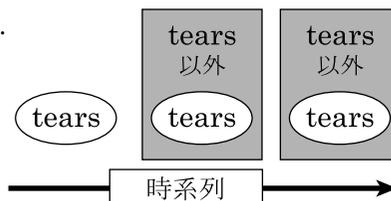
(奥田 1983: 73)

こうした繰り返し表現は, 繰り返される語の意味を強調する。日本語の例は省略するが, 日本語でも同じである。この強調もまた, トートロジーと同じく「対比するものの背景化」が働く。つまり X 以外を背景化することで強調の意味が生じる。

(42) a.



b.



(42a) は (40a) の背景化を図示したものである。繰り返すことで、love 以外の行為が繰り返し背景化されるため、love の意味が純化され、周辺の X (love) がそぎ落とされていく。(40b) もこの図式になる。一方 (42b) は (40c) の背景化を図示している。(42a) と違う点は、時系列の矢印が入っている。ここでは時間の流れに沿って、背景化が連続して起こる。つまり他でもない、同じ X が連続して起こる (泣き続ける) という意味になる。(40d) も同じ図式である。

(42) から分かることは、時系列の有無の違いはあるが、繰り返し表現もまた、トートロジーと同じプロセスを用いることにある。もっといえば、外部背景化のプロセスを用い、意味を強調する。

こうした繰り返し表現とトートロジーが合体したような表現がある。A is A is A. 表現である ((43) は、奥田 1983: 76-77)*¹⁰。

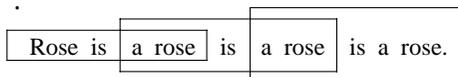
(43) a . *A word is a word is a word* - depending on who says it, how it's said, and how it's heard. - Fast & Fast, *Talking Between the Lines*, p.17

b . McCabe fell in beside him, insisting, "Come on, *a kite is a kite is a kite*. I can see they handle a little different than a plane, but -"
- Cameron, *Sky Riders*, p.70

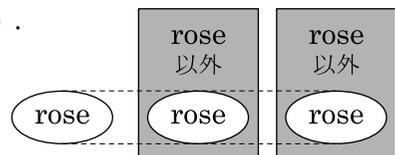
c . *A buck is a buck is a back*, he told himself, and kept right on driving.
- Wohl, *China Syndrome*, p.14

この構文には諸説あるが (吉田 1982: 169, 小西 1982: 100, 安藤 1975: 69, 奥田 1983), 本稿では安藤と同じ立場を取り, (44a) のような構造を持つと考える。[X is X] の形式が重複しながら、連続して起こる。このとき A is A is A. 構文もまた, (42a) と同じ背景化のプロセスを持つ。(44b) に図示する。例文は G. Stein の詩 *Sacred Emily* からの引用である。

(44) a .



b .



トートロジーを重ね合わせることで、rose 以外が何度も背景化される。rose の意味が純化されると同時に、周辺の X (rose) がそぎ落とされ、意味が強調される。A is A is A. 構文もまた、一種の強調表現であり、外部背景化のプロセスをとる。

4.4. 5種の強調表現

以上本節でみた関連表現はすべて、一種の強調表現と考えられる。それと同時にトートロジーもまた、一種の強調表現と言える。それらはすべて周辺の X, または X 以外を背景化することで、意味を強調する。これは強調の本質と言える。X が X であることを強調するのに、単に X と言うのではなく、他でもない X と言うことで意味は強調される。「他でもない」の部分が、「対比するものの背景化」に相当する。同じ言葉を何らかの形で繰り返すことは、「他でもなく」X と述べる強調表現ということになる。ただ異なるのは、何を背景化するかという点と、どのように背景化するかという点に絞られる。簡略化した形で図示すると、(45) になる。

(45)	外部背景化	内部背景化
	A is A is A. 構文 繰り返し表現	トートロジー トートロジー的表現
	擬似トートロジー	

(45) で左にある表現の方が、より直接的な強調表現になる。いずれも背景化のプロセスをとるが、背景化を2つ取れるのはトートロジーのみ、内部背景化をとれるのは、恒真表現（トートロジーとトートロジー的表現）になる。

以上まとめると、トートロジー、トートロジー的表現、A is A is A. 構文、繰り返し表現、擬似トートロジーはすべて、強調表現の一種であり、「対比するものの背景化」を共有する。またそれらは、連続する一つの線上に位置していることを述べた。

5. 英語のトートロジー

すでに英語のトートロジーの文を、上でいくつかあげてきた。本稿の立場は、英語のトートロジーもまた「対比するものの背景化」によって同じく説明される。ただ日本語と違う点がある。英語の反復語には、単数・複数の違いや冠詞の有無の違いがあることである。(46)はその種類と例文になる (Wierzbicka 1986: 104)。

(46) Nabsr. is Nabsr.	War is war; *Wars are wars, *Wars will be wars.
Npl are Npl.	Kids are kids; *The kids are the kids.
Npl will be Npl.	Boys will be boys; *A boy will be a boy.
An N is an N.	A party is a parry; *The party is the party.
The N is the N.	The law is the law; *The war is the war.
N1 is N1 (and N2 is N2).	East is East, and West is West

こうした反復語の違いが、意味にどこまで影響するかが問題となる。Wierzbicka (1986) は、反復語の違いによって、トートロジーの解釈が分かるとした。しかし実際は、かなり文脈や状況によって、トートロジーは、その意味を変えることから、反論または折衷案が提示されてきた (Fraser 1988, Gibbs and McCarrell 1990, etc.)。本稿は形式的な側面に導かれながら、最終的には文脈や状況に応じて意味が決まると考える。しかし(46)に見るように、反復語の違いにより、適格性に違いがでるのは、絶対ではないにしても、一定の傾向があることが予想される。

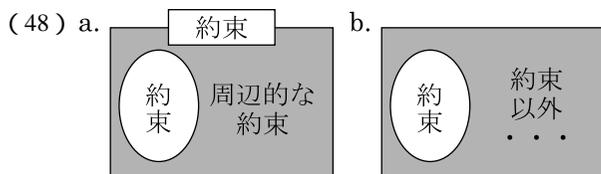
具体的に見ていきたい^{*11}。まず「不定冠詞 (a,an)+ 単数名詞」は、内部背景化のプロセスと結びつく傾向がある。というのも不定冠詞 (a,an) は、ある集合から、任意のメンバーを取り出し、それを典型例として提示する。そのため典型的なものを以外 (周辺のなもの) を背景化する [内部背景化のプロセス] と結びつく傾向にある。一方「無冠詞+ 複数名詞」の場合、外部背景化のプロセスと結びつく傾向がある。複数名詞は、ある集合の全部または大半に言及することで、その集合を記述する。そのため集合体以外を背景化する [外部背景化のプロセス] と結びつく傾向にある。

Wierzbicka (1987: 107-108) の例で考えれば、不定冠詞を用いた (47a) では、内部背景化のプロ

セスになる。つまり [周辺のな約束] が背景化され、約束本来の義務の意味 (約束は守らなければならないもの) になる。一方無冠詞で複数名詞の (47b) の場合、外部背景化のプロセスである。そのため約束以外 (契約など) が背景化され、契約など法的なものに比べ「約束は、約束に過ぎず、あてにならない」という意味になる。(48) は背景化の違いを図で示したものである。

(47) a . A promise is a promise.

b . Promises are promises.

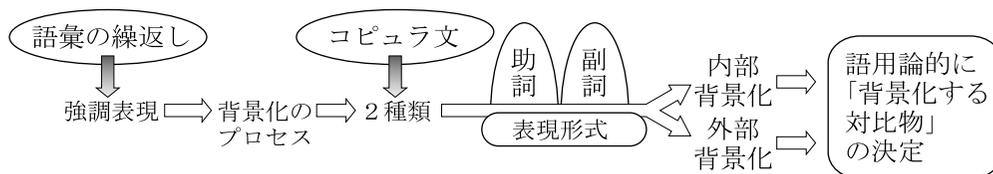


こうした傾向は、時としてトートロジー (例えば慣用的トートロジーなど) の適格・不適格に影響を及ぼす。しかしこれはあくまで傾向であって、ほとんどのトートロジーは、文脈・状況に大きく影響を受けると考えられる。

6 . 有意味化のメカニズム

一見無意味なトートロジーの文が、どのようにして意味を持つのか、その過程を考察する。まず出発点は、語が繰り返されることにある。語が繰り返されることで、強調構文であることが分かり、「対比するものの背景化」のプロセスが適用される。次にコピュラ文という構造から、2つの背景化が導かれる。というのも繫辞 (コピュラ) には、2つの働きがあるからである。Halliday (1967: 66-67) が述べるように、英語の繫辞 be には、inclusive be と exclusive be の2つの用法がある。inclusive be とは、叙述内容が、主語によって表されている内部に向けられるもので、exclusive be では外部に向けられる (cf. 安井 1980)。日本語においても基本的に同じことが当てはまる。つまり繫辞には、中に視点が向く場合と、外に視点が向く場合の2つがある。本稿ではそれが内部背景化と、外部背景化に対応する。実際 (45) で見たように、2つの背景化をもつのはコピュラ文のトートロジーのみである*¹²。そして背景化の選択は、助詞「は」「が」「も」、副詞「やっぱり」「所詮」等、及び表現形式によって、方向付けがなされる。最後に背景化する [対比物] が語用論的に決定され、意味が確定する。(49) に図示する。

(49) トートロジーの有意味化メカニズム



語彙の繰返し，コピュラ文，助詞，副詞，表現形式，語用論的知識の6要因に，背景化のプロセスが加わって，トートロジーは有意味化する。

7. まとめ

本稿はトートロジーを取り上げ，それが一種の強調表現であり，かつカテゴリーを再確認するための構文であると論じてきた。トートロジーには強調構文に共有する「対比するものの背景化」というプロセスが働くことを見た。このプロセスには，内部背景化と外部背景化の2つがあり，意味の多義性(11) - (13)，状況の多様性(15)，副詞との共起関係(19)，英語の冠詞等の違い(47)を説明するとともに，トートロジーの有意味化のプロセスにも関わること(6節)を論じた。

本稿は主に日本語のトートロジーを中心に論を進めてきた。それは日本語のトートロジーが他言語に比べ，豊かな表現を持ち，トートロジー分析の出発点として日本語のトートロジーが有効と考えたからである。今後の課題としては，他言語での検証と，言語間の違いをどう捉えていくかということが残されている。

注

- * 1 坂原(2002)では，他のトートロジーと区別して，記述否定とするが，本稿では同じ原理が働いていると考え，区別しない。藤田(1988)も参照のこと。
- * 2 逆に言えば，対比するものが見つけにくいと，トートロジー解釈は難しくなる。「子供は子供だ」「??水は水だ」の容認性の違いは，子供の対比物として大人はすぐに想起されるが，水と対比するものを特定しにくい。適格になるためには，しっかりと文脈が必要である。
- * 3 坂原(2002)は，2つの解釈を，例外を認めるトートロジーと，例外を認めないトートロジーとして説明する。しかしなぜ2つの解釈があるかの説明はない。
- * 4 坂原(2002)では，(15)はカテゴリーに所属していることを再確認する例として提示している。このとき2つの状況設定を示しているが，この違いに対する議論はない。
- * 5 Okamoto(1993)が述べるように，この「が」を使ったトートロジーは，望ましくない特性を表すことが多い。しかし(22)の例のように，必ずしも否定的な意味を持つわけではない。
- * 6 「XはX」の形式をとる動詞は少なく，「XのはXだが」の形をとるのが普通である。例えば，「動くのは動くが」「走るのは走るが」「進むのは進むが」などがある。たとえ「XのはXだが」であっても，「対比するものの背景化」がやはり働いている。
- * 7 形容詞の場合，「XことはX」の形をとることも多い。例えば「やわらかいことはやわらかい」「大きいことは大きい」などがある。そのときでも背景化のプロセスが働いている。
- * 8 実際，The incumbent president is the president. とか「現在の大統領が大統領だ」と言い換えができる。
- * 9 3回以上繰り返されることもある。奥田(1983)に，again が4回繰り返される例がある。
- * 10 この構文には，A woman is a girl is a woman. のような変化形がある。これについては奥田 1983: 78-80を参照のこと。
- * 11 以下では，不定冠詞と無冠詞複数の2つのみを述べている。他のものについては，こうした傾向の

是非も含めて、再検討していきたい。

*12 擬似トートロジーが、外部背景化しかないのは、指標という外に向かう用法だからである。

参 考 文 献

- 安藤貞雄. 1975. 'A rose is a rose is a rose'. 渡辺登士 他編. 『続クエスチョン・ボックスシリーズ 第23巻: 英語一般B (文字・数詞・句読法など)』 pp.68-69. 大修館書店.
- 安藤貞雄. 1990. 『英語語法研究』 研究社.
- Bulhof, J. & S. Gimbel 2001. "Deep tautologies," *Pragmatics & Cognition* 9-2: 279-291.
- Bulhof, J. & S. Gimbel 2004. "A tautology is a tautology (or is it?)." *Journal of pragmatics*. 36: 1003-1005.
- C. Fillmore, P. Kay, and M.C. O'Connor. 1988. "Regularity and idiomaticity in grammatical constructions," *Language*. 64: 501-38.
- Fauconnier, G. 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction In Natural Language*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤田知子. 1988. 「Une femme est une femme. - 「X は X だ」構文解釈の試み」『フランス語学研究』 22, 15-34.
- Fraser, B. 1988. "Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies," *Journal of Pragmatics*. 12: 215-220.
- Gibbs, R.W., & McCarrell, N.S. 1990. "Why boys will be boys and girls: Understanding colloquial tautologies," *Journal of Psycholinguistic Research*. 19: 125-145.
- Grice, H. Paul. 1975. "Logic and conversation." In Cole, P., and J.L. Morgan, eds. *Speech Acts*. New York: Academic Press: 41-58.
- Halliday, M.A.K. 1967. "Notes on transitivity and theme in English, Part 1," *Journal of Linguistics*. 3: 37-81.
- 樋口万里子. 1988. 「トートロジーの意味理解」『活水論文集. 英米文学・英語学編』 31, 167-186.
- 平井昭徳. 1995. 「英語の名詞的トートロジーの発話状況について」『島根大学法文学部紀要. 文学科編』 24, 139-167
- 小西友七. 1981. 『アメリカ英語の語法』 研究社.
- 小西友七. 1982. 「A is A is A 構文 - ひとつの答」『時事英語研究』 37-1, 100.
- 小屋逸樹. 2002. 「トートロジーと両義性」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 34号. 1-26.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge Univ Pr.
- 三木悦三. 1995. 「トートロジーと呼び起こし」『英語語法文法研究』 (2), 19-33.
- Miki, E. 1996. "Evocation and tautologies," *Journal of Pragmatics*, 20, 433-466.
- 森本俊之. 1999. 「トートロジーにおける解釈的表現について」『名古屋大学言語学論集』 15, 23-35.
- 水崎博明. 1988. 「トートロジーのための1つの試論 - 1 - 」『福岡大学人文論叢』 20(1), 223-262.
- 水田洋子. 1995. 「トートロジー」X-X 構文の研究 - その有意味化メカニズムの体系的把握」大阪大学言語研究科 修士論文.
- 中村芳久. 2000. 「『勝ちは勝ち』『負けは負け』 トートロジーに潜む認知的否定」『言語』 29(11) 350, 71-76.
- 西川真由美. 2003. 「Tautology の考察 - ad hoc 概念の視点から」『語用論研究』 (5), 45-58.
- 西山佑司. 1994. 「メンタルスペース理論におけるコピュラの分析はどこまで妥当か」『認知科学』 1(1),

135-140.

- 西山佑司．2003.『日本語名詞句の意味論と語用論 - 指示的名詞句と非指示的名詞句』(日本語研究叢書) ひつじ書房.
- 西山佑司．1994.「伝康晴, 三藤博両氏のコメントに答える」『認知科学』1(2), 90-94.
- 野田尚史．1996.『「は」と「が」』(新日本語文法選書)くろしお出版.
- Okamoto, Shigeko. 1993. "Nominal Repetitive Constructions in Japanese: The 'Tautology' Controversy Revisited," *Journal of Pragmatics* 20: 433-466.
- 奥田隆一．1983.「同語反復と A is A is A 構文」『近畿大学教養部研究紀要』14(3), 69-81.
- 小野原信善．1993.「Tautology について - A1 is A2 構文への認知的アプローチ」『香川大学教育学部研究報告』第1(87), 51-67.
- 坂原 茂．1993.「トートロジーについて」『東京大学教養学部外国語科研究紀要』40-2. 57-83.
- 坂原 茂．2002.「トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム」, 大堀寿夫(編)『認知言語学 : カテゴリー化』東京大学出版会.
- 瀬戸賢一．1997.『認識のトレリック』海鳴社.
- 佐山公一・阿部純一．1994.「日本語同語反復文の意味解釈 - 反復語および文脈の関わり」『心理学研究』65, 25-33.
- 佐山公一・阿部純一．1999.「同語反復文の意味はどのように解釈されるか」『心理学評論』42-1. 42-62.
- 吉田一彦．1982.『現代英語発見 語法を中心として』三修社.
- Ward, Gregory and Julia Hirschberg. 1991. "A Pragmatic Analysis of Tautological Utterances," *Journal of Pragmatics* 15: 393-406.
- Wierzbicka, Anna. 1987. "Boys will be boys: 'Radical semantics' vs. 'Radical pragmatics'," *Language* 63(1): 95-114.
- Wierzbicka, A. 1988. "Boys will be boys: A rejoinder to Bruce Fraser," *Journal of Pragmatics* 12: 221-224.
- 安井 泉．1980.「英語の be 動詞の多義性 - 四つの be の等質性と異質性」『英語学』(23), 40-67.